
私と彼の生きる道

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と彼の生きる道

【Nコード】

N9181J

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

スーパーセレブな堀西学園の教師・神谷琴美。

恋人からのプロポーズを受け、退職を決意するが、ちょっと気になる生徒がいる……

第1話 プロポーズ

予感があった。

大学3年の時に、一つ上の祐樹ゆうきと付き合い始めて5年。
夜景の綺麗なレストラン。

いつもより緊張した面持ちの彼。

嫌でも分かってしまう。

「琴美ことみ」

食後のコーヒーになった時、
祐樹は声を上ずらせながら私の名前を呼んだ。

「はい」

私はこっそり深呼吸する。

「俺と、結婚して欲しい」

やっぱり。

わかりやすいんだから、祐樹は。

そして、私の答えも決まっている。
私は満面の笑みで言った。

「はい！」

「じゃあ、結婚するの！？」

「うん」

昼休みの職員室、の、隣の教師用サロン。

私は友人で国語科の教員である、石井佳苗^{いしいかなえ}に昨日の出来事を告げた。

「うわー、いいなあ、琴美！」

「何言ってるの。佳苗は美人だからよりどりみどりで、1人に絞れないだけでしょ」

「まあね」

「・・・」

実際、佳苗は美人だ。

うちの高校の教員の中じゃ、間違いなくNO. 1。

一方の私は・・・まあ「平均的」と言ったところか。

いや、どちらかと言えば、真面目タイプだと思う。

服も、佳苗みたいにお洒落じゃなくって、スーツで無難にまとめるだけだし、

黙っていれば、「ツンとしてる」と思われがち。

唯一の自慢は綺麗な髪だけど、これも肩までの真っ黒なストレート。

だって、下手にお洒落しても生徒にバカにされるだけだもの。
その点、佳苗は生徒にも一目置かれている。

「仕事は？続けるの？」

「辞める。彼、福岡に転勤なんだって」

「ええ？じゃあ、琴美、福岡に行っちゃうの！？」

「うん」

「えええ〜！置いていかないでよ・・・」

「何言ってるの。子供じゃあるまいし」

でも、そう言いながら、私の心中は複雑だった。

祐樹の転勤は夏から分かっていたこと。

そこに、レストランデートのお誘い。

祐樹が、私と結婚して一緒に福岡に行きたいと思ってるのはすぐに分かった。

だから、私はまだプロポーズされたわけでもなかったのに、
昨日まで散々悩んだ。

親とも友達とも離れて、見ず知らずの土地へ行くことの寂しさ。
それと、大好きな祐樹と一緒にいたいという気持ち。

結局私は後者を選んだ。

教師という職に未練がないことはない。

でも、祐樹は私に専業主婦になってもらいたいみたい。

私もそれに応えたい。

それに・・・もうこの学校には正直うんざりだ。

ちょうど予鈴がなり、私と佳苗はサロンを出た。

5限が始まる。

私の担任する3年C組だ。

私は重い足取りで、教室へ向かった。

教壇に立ち、淡々と授業を進める。

途中、「質問は？」とか聞いてみるけど、当たり前のように反応はない。

お昼ごはん直後の数学の授業、ともなれば、やる気がでないのも当然かもしれないけど、それだけじゃない。

この子達は、いつもこんな感じだもの。

ここ、私立堀西学園はかなり特殊な学校だ。

東京の一等地のバカみたいに大きな敷地内に、小学校から短大・大学までがあり、

通うのは大金持ちの御子息・御令嬢のみ、というセレブな学園。全員が小学校から入学し、途中から入ってくる生徒はいない。

そういえば、中等部にどこぞの財閥の一人娘がいたっけ。

まあ、とにかくそんな学校。

女の子は短大か大学を出た後、花嫁修業をしてこれまた大金持ちに嫁いだり養子をもらったりする。

男の子は大学を出た後、父親が経営する会社に入ったりする。

受験もない。就活もない。

これじゃ、真面目に勉強しろって言う方が無理だ。

それに、生徒はセレブでも教師はごくごく普通の庶民。
だから生徒もどこことなく教師を見下している。

こうなると、教師の方もやる気が出ない。

だって、誰も授業聞いてないんだもん。

取り合えず赤点がでなければ、追試なんて面倒臭いもの作らなくて済むわ、ってな勢い。

私は、佳苗曰く真面目過ぎるのか、そこまで割り切ることはできないけど、

やる気がでにくいのは事実。

教師を目指してた頃は、金八先生とまでは言わなくても、
生徒と信頼関係を築いて、立派に「先生」やろうと思ってたのに。

って、ダメよ、教師がそんなことじゃ。

例えば生徒が聞いていなくても、ちゃんと授業しなきゃ！

よし！

私は声のトーンを強めた。

「じゃあ、この問題を・・・」

教室を見回してみる。

やっぱりみんなつまらなそうな顔をしているけど、
私は一応（いや、当然）居眠りを禁止しているので、なんとかみんな起きてる。

いや・・・一人変なのがいるぞ。

「・・・和田君。起きなさい」

「~~~~」

「和田君！」

「ほえ？」

「ほえ、じゃない！今時、瞼に目を書いて居眠りする人間がいますか！」

「バレタか」

当たり前でしょ！！

クスクスと忍び笑いが教室中から漏れる。

「和田君。この問題、前に来てやりなさい」

「聞いてなかったからできませーん」

「・・・」

この和田宏君は、C組のムードメーカー。
そしてビールシェアNO.1のSビールの次期社長だ。

その肩書きをフルに活用し、合コン三昧の日々を送っている、らしい。

どこのジゴロだ。

・・・歳がバレル。

「じゃあ、宿題にするから明日解いてね」

「え〜!？」

他の先生はここまで言わないものね。

でも、この神谷琴美様を舐めるんじゃない。

私は勢い良く教科書を閉じ、「今日はここまで!」と言った。

第2話 セレブな生徒達

結婚を決めてからの数ヶ月は忙しさであっという間に過ぎ、もう1月だ。

冷え込みも厳しくなったけど、

教室はもちろん、廊下も体育館も全て冷暖房完備の堀西高校の中は温かい。

ちなみに、建物は違うけど、初等部（小学校ね）では、

「小さなお子様方は敏感だから！」という訳で加湿・除湿にも抜かりがない。

私のうちなんかより、よっぽど居心地がいいわ。

私はぬくぬくの職員室を出て、ぬくぬくの廊下を歩き、ぬくぬくの3年C組に向かった。

明日の朝配るプリントを準備するためだ。

って、この学校、エコって言葉を知らないのか。

「あれ？」

C組の教室から明かりが漏れている。

もう夜の8時だから残っている生徒はいないと思ったのに。

・・・もしかして。

嫌な予感がして、窓からこっそり教室を覗いてみる。
教師の私がこんなことしてる時点で、この学校での教師の立場がわかるというもの。

やっぱり。

私はため息をついた。

教室の中で、4、5人の男女が机の上に座ってたむろしている。
瞼の上に目玉がある和田君を初め、C組の中心的メンバーだ。
同時に、私の苦手な生徒達でもある。

その中の1人の女の子が、長くて綺麗な足を短いスカートからこれ見よがしに出し、
隣の男の子にしなだれかかった。

「ねえ、真弥あ。クリスマス、どこ連れてってくれるの？」

目が潤んでいて、女の私から見ても色っぽい。
本当に18歳か？

彼女は、石黒さくら。
パチンコ会社社長の一人娘で、それこそ目に入れても痛くないほど可愛がられている。
そして期待を裏切らず、絵に描いたようなワガママなお嬢様だ。

一方、しなだれかかれた方の男の子は、石黒さんより遥かに長い足を組み、
気のない様子で、「別にどこでもいい」とか言ってる。

彼は本城真弥。ほんじょうしんや おうちは・・・何してるんだっけ？
まあ、どっかの金持ちだ。それは間違いない。

本城君の家の情報が私の頭に入っていないのには理由がある。
そんなことどうでもいいくらい、彼は問題児だからだ。

その理由はいくつかあるけど、一つは女性関係。
とにかくモデル顔負けの物凄いイケメン、加えて堀西高校の生徒、
という訳で、

言い寄る女は星の数ほどいると言っても過言じゃない。

しょっちゅう女をとっかえひっかえしていて、1ヶ月持てばいい方
じゃないだろうか。

でも当の本人はあまり恋愛に興味がないらしく、
「言い寄られるから適当に付き合って、飽きたら別れる」という典
型的な遊び人。

どうやら今は石黒さんと付き合っているらしい。

彼らの話題は目下、来週のクリスマスの過ごし方のようだ。

私はもちろん祐樹と過ごすけど、いつもよりちよっとお高めのバー
に行くくらい。

結婚費用も貯めないといけないし、そもそもここの生徒みたいにお
金持ちじゃないし。

でも、和田君たちは「私は家族でモルディブ」とか、
「俺は彼女とヒルトンのスイートに泊まる」とか、とんでもないこ
と云ってる。

お祝儀をくれ、お祝儀を。

「マリッジブルー？」

「いや。日本の経済格差について悩んでるだけ」
「？」

職員室の席でため息をついていると、佳苗が近寄ってきた。

「ねえねえ、結婚式はいつ？」

「1月末。彼の転勤はお正月明けだから本当は12月中にしたかったんだけど、式場が空いてなくなってる」

「クリスマスシーズンだもんねー」

「そうなのよ。だから先に彼だけ引越して、結婚式の日だけ東京に戻ってくるの。」

私はどちらにしろ卒業式が1月末だからそれまでは東京にいるわ」

「じゃあ琴美も生徒と一緒に卒業だね。校長には話したの？」

「うん。『残念だけど仕方ありませんね。神谷先生は女の人ですからね』なんて、

旧石器時代な発言された」

「あははは！式には呼んでよね！」

「うん、絶対来てね！」

忙しい祐樹とはなかなか時間が合わないけど、それでもなんとか郊外の一軒家風のレストランで、
結婚式をすることが決まった。

式まで後1ヶ月ほどしかないので、すごくタイトなスケジュールだけど、

結納も終わったし、お母さんと一緒にドレスも決めた。

どんなドレスにしたか、祐樹には当日まで内緒だ。

後は、使う音楽や飾る花、細かい演出なんかを考えないといけない。ブライダルエステも行きたいし、2次会の準備も・・・

ああ、やることがありすぎる！！

「新居の準備は？」

「取り合えず、祐樹の会社の社宅に入るわ。福岡まで探しに行く時間ないし」

でも、家電とか家具は買わなきゃ。

そういえば祐樹が「車もある」とか言ってたな。

貯金、足りるかなあ。

「生徒にお祝儀もらいなよ」

「・・・それ、さっき本気で考えた」

「じゃあ今のうちに、『結婚します！』って宣伝しとかなきゃ」「そうねー」

もちろん、生徒にそんなものもらえるとは思ってないけど、

子供を堀西に通わせるくらいの家だったら、お祝儀ってどれくらい包むんだろう？

なーんて無意味なことを考えながら、

私は期末テストの採点をすべく、ペンを取った。

第3話 進路面談

後少しでこの学校とも、教師という職業ともお別れ。

そう思うと、「やる気が出ない」なんて言ってられない。

せめて最後だけでも、ちゃんと教師らしいことをしたい。
一生懸命授業をやりたい。

そこで私が考えた案。

「今から定期テストを返します。今回は点数も公表するわね」
「プライバシーの侵害だ!!」

「侵害されても恥ずかしくない点数取りなさい。はい、和田君、3
4てーん」

「うわ！」

こうすれば、3学期はもうちょっと頑張ってくれるかもしれない。
ちよっとスパルタ過ぎ?

でも、温室育ちのお坊ちやま・お嬢ちやまにはいい薬でしょ。

「本城君、92点。惜しかったわね、もうちょっとで満点だったの
に」

私は笑顔で本城君に解答用紙を差し出したけど、

本城君は無言でそれを掴み取り、さっさと席に戻った。

そうそう、これこれ。本城君が「問題児」たるゆえん、その2。

経済格差ならぬ、成績格差。

本城君は、ALL or NOTHING な性格で、興味があることには異常に熱を上げるけど、興味がないことには、まるで無関心。

例えば部活のバスケットは凄く頑張ってる。背も高いからいい選手なようだ。

でも、恋愛にはてんで無関心ときてる。

これは勉強に対しても同じだ。

理数系の科目が得意らしく、特に数学は毎回トップ。

でも、古典なんていっつも赤点すれすれだ（それでいて赤点じゃないところが憎らしい）。

小学校の時に3年ほど留学していたらしく、英語のリスニングと長文読解力はそこそこのいいけど、文法に至っては中学生レベルだ。

数学の教師としては、文句はない。

でも担任としては大いに文句のつけようがある！

今日の進路面談、覚悟してなさい！！

「はあ」

「何、ため息ついてんですか？」

「ああ。ごめんなさい。えっと、本城君は・・・このまま堀西大を希望、ね」

そうだった。

進路面談って、実質、堀西大学のどの学部を希望するか聞くだけだった。

ごく稀に、家の経済的な事情で堀西大に進学しない生徒や、もつとごく稀に、志高く他の大学を受験する生徒がいる。

そんな生徒には、ちゃんとした進路面談が必要だけど、幸か不幸かC組にはそんな生徒はいない。

「学部は？」

「どこでもいいです」

無気力に答える本城君。

こうやって向かい合って座っていると、一瞬生徒ということも忘れて見とれてしまいそうになるけど、

この無気力は頂けない。

これでもっと生き生きとしていれば、本当にいい男なのに。もったいない。

「どこでもいいって訳にいかないでしょ」

「じゃあ、国際情報学部」

「・・・」

本当に「どこでもいい」なんて思ってる生徒が行く学部だ。

「ね、ねえ。本城君は理数系が得意だから、工学部とかは？もしくは薬学部とか」

「俺んち、薬屋じゃないし」

「・・・そうよね」

なんて「堀西」的なお答え。

そりゃ、薬屋の跡継ぎでもなきゃ、堀西大の薬学部になんて行かないよね。

ちなみに私と本城君の言っている「薬屋」っていうのは、「町のお薬屋さん」じゃない。

製薬会社のことだ。

「そういえば、本城君のお家って何をされてるの？」

「・・・弁護士事務所」

そうだった。本城弁護士事務所。そうそう。

これも「町の小さな弁護士屋さん」じゃなくって、会社のような大きな事務所だ。

って、おーい。

「じゃあ、法学部に進まないダメでしょ!？」

本城君で、確か長男だ。

家を継がないといけないだろう。

となると、当然弁護士の資格が必要だ。

司法試験のことはよくわからないけど、法学部に所属していれば免除される試験があるはず。

「どこでもいい」訳ないでしょ。

「・・・」

「本城君？」

あれ。

どうしたんだろ。

法学部に行きたくないのかな。

そりゃ法学部じゃなくても、司法試験は受けれるけど。

「・・・今決めないとダメですか？」

「そんなことないけど、大学に推薦状を書くから3学期が始まった
ら教えてね」

なんでもありの堀西だ。

本当は推薦状なんてなくてもいいくらい。

一応「入試」と名のつくものもあるけど、落ちた生徒なんて聞いた
ことないし。

本城君は、わかりました、とだけ答えて教室を出て行った。

第4話 クリスマスイブ

「ごめん！」

「・・・もういいわよ」

「今度、埋め合わせするから」

「うん。お仕事頑張ってね」

私はそう言っただけで携帯を切り、ため息をついた。

毎年年末は忙しくてバタバタしているのに加え、
出勤前で色々忙しいんだろう。

仕方ない。

クリスマスイブ。

祐樹とデートの約束をしていたけど、どうしても仕事を抜けられな
いということだ、

お流れになってしまった。

私は携帯をバッグにしまうと、お店の中に戻った。

祐樹を待ってる間に少し飲んだカクテルの支払いをしないといけな
い。

どうせなら、バーに入る前に電話くれればよかったのに。

独身最後のクリスマスで、楽しみにしてたし。

私はなんとか仕事を切り上げて、約束の時間にちゃんと来たのよ！

・・・とまあ、愚痴はあるけど仕事なら仕方ない。

私も社会人として、そこは納得することにした。

結婚したら専業主婦になるから、こうやって毎日祐樹の帰りを1人で待つのかな？

ご飯作って待ってたのに、「外で飲んできた」とか言われて喧嘩するのかな？

で、私が拗ねてベッドで寝てると、祐樹が「ごめんね」と言っただけで、私もぐりこんでくるんだ。

そんなことを妄想してニヤニヤしながら私はバーを出た、が・・・

街にはジングルベルが鳴り響き、道行くカップルはみんな幸せそうだった。

結婚を控え、私はその中でも一際幸せなはずだったのに、なんで1人で歩いているんだか。

さっき「納得した」とか言いつつ、全然そんなことのない私。なんて子供なんだろう。

でもやっぱりこの華やいだ雰囲気から1人取り残されるのは寂しい。

生徒達ですら、今頃恋人と楽しんでいることだろう。

・・・そうだ。

昨日、ようやく全員の進路面談が終わった。

はつきりしない本城君を除き、全員が堀西短大・大学のどの学部に進むのか決まった。

本城君みたいに「どこでもいい」って言う生徒が大半かな、と思ってたけどそんなことはなく、

正直助かった。

みんな家を継ぐことを考え、その為に必要な技術を身につける学部をちゃんと選んでいる。

そりゃ生まれた時から跡取り扱いされてれば、当然かもしれないけど。

どうしようかな。

祐樹、今度埋め合わせするって言ってた。

だったら、今のうちに書ける推薦状は書いておこうかしら？

どうせ帰っても暇だしね。

よし。

私は高校へ向かう電車の切符を買った。

最寄駅のK駅から堀西高校までは、歩いて20分ほど。

私はいつもはバスを使うけど、もう9時を回っていて、バスがない。

と、言うことに気づいたのは、K駅に着いてからだった。

・・・ほんと、ついてない。

でもここまで来たんだ。歩こう。

9時なんて早い時間にバスがなくなるのには理由がある。
利用者がいないから。

至ってシンプルな理由だ。

このあたり一帯は、堀西の保有地。
一般住民はいない。

だっ広い土地の中に、初等部・中等部・高等部・短大・大学の校舎が点在しており、
それぞれに体育館や運動場、図書室、学食なんかを持っている。
入所は自由だけど、ホテル並みの学生寮もある。

後、教師の寄宿舍もあり、遠方に実家がある教師はそこに住んでいる。

そんな教師は当然徒歩通勤だし、それ以外の教師は車通勤だ。
電車で来るのなんて私くらい。

ちなみに生徒は電車なんぞ使わない。
送迎用の自家用車があって当然だ。

だから、普段でもバスはガラガラ。
私以外には、堀西に用事のある業者や、学食で働いている人が利用するぐらい。

終バスが8時台と言うのも頷ける。

あー、もう！寒い！

私は足を速めた。

なんでクリスマスイブにこんな思いしないといけないのよ！
本当は今頃バーで祐樹とまったり飲んでるはずだったのに！

ヤケクソになりながら、ほとんど走るように校門をくぐる。

校門から高等部の校舎までが、また結構あるのよね！

昼間なら綺麗な木々に囲まれたメインの通りだけど、
こう真っ暗だとなんか怖い。

お化けでも出そう。

校舎と運動場以外は林みたいなものだもんね。

セキュリティはバッチリだけど、お化けにはそんなもん通用しない
だろう。

・・・あれ？

私は足を止めた。

今、何か聞こえたような・・・
女の人の叫び声みたいなの・・・

一気に血の気が引いた。

どうしよう！

まさか、本当にお化けが!?

そんなバカな、という結論に至るまでに1分ほどかかった。
そしてここは堀西の敷地内。

この時間だし、部外者はいないだろう。

ってことは、生徒か教師の声である可能性が高い。

私は迷った。

警備室に行つて、警備員に任せた方がいいだろうか？

でも、ここから警備室はかなり遠い。

もしその間に何かあったら・・・

私は少し悩んだけど、鞆を胸の前で抱きしめると、

思い切つて声のした方へ歩き出した。

第5話 彼と彼女

確かこっちの方だったような・・・

私は高等部の体育館の脇を歩いていた。

さっきの声は断続的に聞こえてきて、そのボリュームは少しずつ大きくなってきている。

そしてその正体はつきりするにつれ、私の気持ちは落ち着いてきた。

確かに「女の叫び声」ではあるけど、どうやら悲鳴ではない。

本当に何か叫んでいるようだ。

それも助けを求めている、とかいう類のものじゃなくって、恐らく・

いた！

体育館の入り口付近に、一組の男女が立っていた。

高等部の制服を着ている。

男の子はこちらに背を向けてて顔は見えないけど、女の子の方ははつきりと分かる。

石黒さんだ。

ということは、男の子の方は本城君だろうか？

いや、間違いなく本城君だ。

あんなに足の長い男の子は他にいない。

私は木陰に隠れて、様子を見た。

もっとも真っ暗だから、そんな必要もないんだけど。

石黒さんは何やら物凄い勢いで本城君に怒鳴っている。

ほとんど半泣きだ。

本城君の表情は見えないけど、その背中が「うるさいなー、めんどくさいなー」と語っている。

早い話が痴話喧嘩だ。

確か石黒さんは寮生だから、

（父親の余りの溺愛っぷりを見かねた母親が、寮に入れたらしい）
デートの後、本城君がここまで送ってきて、
何かの拍子に喧嘩になってしまったんだろう。

それにしても石黒さん、凄いな。

私、誰かにあんなに怒鳴ったことない、って言うか、怖くて怒鳴れない。

ましてや好きな人になんて。

私は立ち去ることも忘れ、呆気にとられてその光景を見ていた。
と。

バシッ！！

石黒さんの手が本城君の頬を打った。

・・・すごい・・・

石黒さんは、「バカ!!」と言い捨てると、
凄い勢いで走り出した。

私の目の前を通って行ったけど、私のことなんてまるで視界に入っていないようだ。

石黒さんは寮の方へと走って行き、あっという間に暗闇に消えた。
その後姿を杳然として見ていると、頭の上から声が降ってきた。

「何してんの？」

「・・・へ？」

見上げると、左頬を少し赤くした本城君が立っている。

「げ」

「何だよ、げ、って。覗き見？」

いつもは一応敬語を使う本城君なのに、
なんか言葉が荒い。
怒ってるんだろうか。

「い、いや・・・ごめんなさい。そんなつもりじゃ・・・」

本城君は、ふん、と鼻をならして、尚も私を見おろしたままだ。

本城君は背が高く、私は低いから、当然「見おろす」ことになるんだけど、

なんかちょっと違う。

「見おろす」って言うか「見くだす」って言うか・・・

「覗き見をしていた子供を叱ってる」的な目だ。

おい。私、教師なんですけど？

「今、帰り？」

「え？ ええ・・・」

って、違う。

学校に戻って来たところだ。

でも訂正できる雰囲気じゃない。

「ふーん。教師は学校で酒飲むんだな」

「！」

私は慌てて口を手で覆った。

やだ！私、お酒臭い！？

「こ、これは！今まで外で飲んだのよ！ちょっと事情があって・・・」

「事情？振られて自棄酒とか？」

「・・・違うわよ。振られてない」

本城君はまた、ふーん、と言って私に背を向け歩き出した。でも、5歩ほど行ったところで立ち止まり、振り返った。

「帰らねーの？」

「え？ ああ、帰る・・・」

いやいや、帰らないって。

でもやっぱり訂正できない。

「なら、行こーぜ」

「へ？」

「もうバスないだろ。駅まで歩くんだろ？」

「・・・」

何それ。

駅まで送ってくれるということなのか。

私、生徒に送ってもらおうほどお子ちゃまじゃないんだけど。

ちょっとムツとしたのが顔に出たのか、

本城君は付け加えた。

「そんな酔っ払ってたら、誰かに後つけられてもわかんないだろ」

「・・・」

「酔ってなくても、わかんなさそーだけど」

「酔ってません！それに、そんな無防備じゃありません！」

「人が喧嘩してるところポケーっと口開けて見てたくせに」

「・・・」

なんなんだ。

なんで私、生徒にこんなにやり込められてるんだ。

本城君はそれだけ言うと、また歩き出した。

私はしばらくその背中を見ていたけど、仕方なくついていくことにした。

第6話 本心

「・・・」

「・・・」

私達は無言で駅への道を歩いていた。

たださえでも長い20分の道のりが、今日は何時間にも思える。

何か話さねば。

「い、石黒さん凄いな」

「・・・」

会話のセレクトを間違ったようだ。
でも今更やめられない。

「彼氏に向かって、なかなかあそこまで怒鳴れないよね。なんか『女』を感じた」

「彼氏？」

本城君が顔をしかめる。

「俺、石黒の彼氏じゃねーよ」

「え？ そうなの？ 付き合っていないの？」

「付き合っていない」

あれ。

「じゃあ、石黒さん、どうしてあんなに怒ってたの？」

「石黒は俺と付き合ってるつもりだったらしい。俺が、そんなつもりもない、って言ったら、いきなり怒り出した」

「・・・・・・」

石黒さんのことだ。

自分が好きなら、当然相手も自分のことを好きだと思ってたんだろう。

だけど。

「それは本城君が悪いよ」

「・・・・なんでだよ」

「人としては間違っていないかもしれないけど、男としては間違ってる。

いくら石黒さんの勝手な思い込みだとしても、もうちょっと優しく断らなきゃ」

「・・・・」

「本城君はモテるだろうから、ちょっとやさっと女の子に冷たくしても平気だろうけど、やっぱり女の子は傷つくと思うよ？女の子が悪い場合でも、思いやりは忘れちゃダメよ」

「・・・・」

「遊ぶにしてもそれなりに気を使わなきゃ、後で痛い目に合うわよ」
「・・・・なんだよ、人を遊び人みたいに」

遊び人でしょ。

「今、『遊び人だろ』って思ったろ」

「・・・・なんでわかるの？」

「顔に書いてある」

私が思わず顔を擦ると、本城君がクスツと笑った。いつもの冷めたような笑い方じゃなくて、本当に思わず笑った、みたいな笑顔。

本城君でもこういう笑い方するんだ。

「俺、そんな遊んでないし」

「遊んでるでしょ」

「・・・先生も気を使わないな。高校に入ってから付き合ったのなんてせいぜい10人くらいだよ」

「3年間で10人も付き合えばじゅうぶんよ」

とは言いつつ、ちょっと意外だ。

正直もっと多いと思ってた。

私が本城君の彼女だと思っていた女の子達は、石黒さんのような「自称彼女」が多いのかもしれない。

そういえば、こんな話を聞いたことがある。

本城君には10歳くらい下に弟がいる。

その子が初等部に入ってきた時、本城君を狙っていた女の子が弟に取り入ろうとしたらしい。

それを知った本城君は、その女の子に、「くだんねーことすんな」と冷たく言い捨てた。

その時の本城君の怖さと言ったら・・・教室中が静まり返ったらしい。

モテるというのも、本人にとってはわずらわしい事が多いのかもしれない。

「先生はモテナさそうだな」

「・・・私の話、聞いてた？」

女の子には優しく、だってば！

・・・それとも私は女ではないと？

そりゃまあ、本城君から見れば「女」というより「教師」だろうけど。

「そんなんだから、振られるんだ」

「だから、振られてない！結婚するんだから！」

と、いけない！

私は手で口を押さえたけど、後の祭りだ。

この3年生と一緒に私も卒業するわけだから、

結婚のことも退職のことも生徒には言わないでおこうと思ってたのに。

本城君は目を見開いた。

「結婚すんの？」

「・・・悪い？」

「・・・ふーん」

本城君はそれからしばらく黙ってたけど、ポツリと呟いた。

「学校は？」

結婚のことを言ってしまったから、仕方がない。

私は正直に言うことにした。

「卒業式が終わったら辞めるわ。他の生徒には言わないでね。まだ知らない教師もいるし」

「・・・結婚したからって、学校まで辞めなくてもいいだろ」

「地方に行くの。専業主婦になるわ」

「・・・」

本城君はまた沈黙した。

何故かさっきまでの沈黙より重い気がして、私は話題を変えた。

「そういえば本城君。学部、考えた？」

「・・・まだ」

「司法試験を受けるなら、やっぱり法学部がいいわよ？」

他にどうしても行きたい学部があるならともかく、

どこでもいいなら取り合えず法学部に行った方がいいと思う」

「・・・」

本城君は少し顔をそむけた。

もしかして、本城君。

「どこでもいい」んじゃなくって、

「法学部に行きたくない」んじゃないのかな。

それって・・・

「本城君。お家、継ぎたくないの？」

本城君は一瞬怖い顔をして私を見た。

けど。

すぐに気の抜けたような表情になり、小さく頷いた。

「うん」

別にいつもの本城君の声だ。

でも私にはまるで、

何か悪いことをして、それを親に見つけた小さな子供が、

怯えつつも少しホッとして「ごめんなさい」と言うような声に聞こえた。

たぶん本城君は、家を継ぎたくないことをずっと1人で悩んでたんだ。

おそらく、ご両親にも相談せずに。

本城君が理数系の科目が得意なのは、元々かもしれないけど、

ひょっとしたら、「弁護士」という文系の最高峰の職業への反発からかもしれない。

大学で法学部以外へ入ることは、跡取りの地位を放棄するという意思表示になる。

そして本城君はそれを望んでいる。

でも、小学校の頃から堀西に通い、箱入り娘ならぬ箱入り息子として育った本城君が跡取りの地位を放棄した場合、将来どうなるんだろうか。

ご両親はそこまで面倒みてくれるんだろうか。

仮に国際情報学部に進んだとして、卒業後、どんな職につけると言うのか。

あんな学部、「大卒」という資格を得るためだけの学部だ。大して学ぶこともない。

取れる資格もせいぜい教員免許がいいところ。

それとかなり努力が必要だから、希望する学生はほとんどいない。

それに・・・

本城君が家を継がないとなると、親の期待は弟の方へ向くだろう。

多分、本城君はそれを分かっている。

まだ弟が幼すぎて、そんな弟に親が期待するなんて想像もできないんだ。

でもその弟も10年たてば、今の本城君と同じ歳になる。

私は本城君にそのことを言おうと、口を開いて・・・でも、言葉を飲み込んだ。

今それを本城君に教えれば、きっと本城君は法学部に進み、家を継ぐと思う。

弟に自分と同じ重圧を味わわせないために。

お家の人も、社員も喜ぶだろう。

だけど、それって本城君にとって本当に幸せなことなんだろうか？

私は駅につくまで、それ以上本城君と話すことができなかった。

第7話 合コン

生徒は冬休みでも、教師には仕事がある。

私は職員室の自分の席で、改めてC組の進路希望表を見た。

勉強に関してはさっぱりな生徒達だけど、

自分の進路については、本当に真剣に考えてると思う。

病院の跡取りは医学部へ、

自動車メーカーの跡取りは工学部へ、

なんていうのは、もちろんのこと、

華道の家元の跡取りは、本人は大学へ進学したそうだったけど、諦めて家で修行に入ると言う。

和田君は経済学部経営科で、会社経営について学ぶ。

石黒さんのように養子をもらうことを期待されている女の子も、

短大の服飾科に進み、花嫁修業をするようだ。

石黒さん・・・

そうか。例え愛し合っていたとしても、石黒さんは本城君とは結婚できないんだ。

本城弁護士事務所の跡取りである本城君は、石黒家の養子になれないから。

石黒さんもそれはわかっているはず。

そうと割り切って遊ぶことはできるだろうけど、本城君のことは本気みたいだった。

いずれ他の男とお見合いしないといけないと分かっているがらの恋

は、辛いに違いない。

でもそれが、石黒家の一人娘として生まれてきた彼女の運命だ。
贅沢三昧で育ててくれた親への恩返しだ。

逆らうにはよほどの覚悟が必要だろう。

だけど、好都合とでも言うべきか、本城君は家を継ぐ気がない。
いっそ石黒さんと結婚して石黒家の養子になれば、将来の心配はいらない。

ただ、問題は本城君が石黒さんに興味が無いということ。
うまく行かないものだ。

「神谷先生ー」

「あら？和田君？」

思わぬ来客に驚き、私は慌てて進路希望表を裏返した。

「どうしたの、冬休みなのに」

私服姿なのに堂々と職員室の椅子に座る和田君。
既に大物の風格だ。

「寮の女子を合コンに誘いに来た」

「・・・相変わらずね」

「先生も来る？」

「間に合ってます」

「えー？堀西大の男も来るよ？上手く行けば玉の輿じゃん」

「それを言うなら、和田君と結婚する以上の玉の輿はないわね」

「まーね」

和田君は堀西の中でも、かなりセレブだ。
お小遣いってどれくらいなんだろう。

「真弥も来るし」

「真弥？ ああ、本城君？」

「そう」

そう言って、職員室の入り口辺りを指差す。
そこには和田君と同じく私服姿の本城君が。

うーん。私服だと、本当にどっかのモデルだ。
そっか。本城君の場合、そういう進路もありだな。

「・・・和田君にはありえないけど」

「なんか言った？」

「いえ、何も」

和田君も見た目はそこそいいけど、なんせそのキャラクターが特徴的過ぎて、

顔に目が行かない。

それに、さすがに本城君のように、モデル並とは言えないし。

和田君が手招きすると、本城君も職員室に入ってきた。

私服姿の学生が二人もいるとさすがに目立つけど、

もう年末で有給の教師も多く、職員室はガランとしてるから、まあ
いっか。

「先生も合コンに行くってさ」

「行きません」

本城君は、あはは、と楽しそうに笑った。
和田君には心許せるのか素を見せているらしい。

「先生は彼氏がいるんだってさ」

「え!?!? そうなの、先生!?!?」

「あのね。私、25歳よ。彼氏くらいいてもいいでしょ」

「えー、いなさそうなのに」

「失礼ね」

和田君は笑いながら椅子から立ち上がると、本城君に言った。

「俺、寮に行つて来るから、ここで待っとけよ」

「ああ」

和田君が鼻歌を歌いながら（下手なんだから・・・）職員室を出て
行くと、

本城君はコートのポケットに手をつつこんで、私の机にもたれかか
った。

「合コン、ね」

私がわざと嫌味っぽく言うと、本城君は肩をすくめた。

「宏曰く、合コンもビジネス、だってさ」

「ビジネス?」

「コネ作り」

「・・・ああ、なるほど」

確かに和田君みたいな人の場合、ほうぼうにコネを作っておくと将

来役立つのかもしれない。

ただ遊びまくってるだけかと思ったら、意外と考えてるんだ。

「でも、目的の大半は女の子でしょ」

「そりゃあね。でも宏は堀西以外の女との合コンの時は、自分の身分を隠してるよ」

「え？ どうして」

「Sビル次期社長の肩書き目当てに近寄ってくる女は面倒くさいんだって」

なんて擦れた高校生だ。

いや、そんなことを気にしないといけないなんて、大変なのかもしれないけど。

「本城君は隠さないの？」

「隠すも何も、俺の家くらいの肩書きじゃ、なんの魅力もないし」

・・・うーん・・・

確かに、本城君は和田君と違って、堀西の中では低所得者層だ。といっても、もちろん庶民から見ればじゅうぶんセーブだけど。

「ねえ、本城君って月にお小遣いどれくらい貰ってるの？」

「小遣い？ うち、親が厳しくて少ないよ。5万」

「5万！？ 5千円じゃなくって！？」

「5千円ってどこの小学生だよ」

「私、高校の時、5千円だったもの！」

「・・・携帯代も払えないんじゃないの？」

「私の時代は、携帯なんてなかった！」

「・・・オバサン」

「なんですって！！！」

私は思わず定規を本城君の喉につきつけた。

「・・・暴力反対」

「うるさいわね!・・・ねえ、ちなみに和田君はいくらなの？」

「宏は小遣いなんてもらってるよ」

「へ？」

「親のブラックカードを無制限に使ってる。たまに、自販機で『な
んでカードが使えないんだ』とか言ってる、

俺に小銭せびってくるけど」

「・・・」

私が顔を引きたらせっていると、本城君はお腹を抱えて笑った。

って、あれ？和田君も本城君も、職員室に何しに来たんだっけ？？

第8話 家庭訪問！

3学期が始まった。

生徒達の、自分の進路に対する考え方、
本城君の、家を継ぎたくないという決心、
和田君の、将来のために合コンすらビジネスだというスタンス、
そういう物に触れ、
私の中で何かが少しだけ変わった。

この子達は、恵まれた環境で何不自由なくのほほんと暮らしている
だけじゃない。

彼らなりに将来を考え、必死にもがいているのだ。

そう思うと、私も自然と今まで以上に授業に気合が入る。

生徒達が聞いてるとか聞いてないとかは関係ない。

生徒が頑張ってるのに、教師の私が頑張らなくてどうする。

とはいえ、受験も就活もない3年生の間では既に卒業ムードが漂い
始めている。

それに3年生の3学期は1月しかないから、あっという間に終わる。

早くも春休みの旅行の予定を立てる生徒、
さすがに医学部入学に向けて勉強する生徒、
大学用の服をファッション雑誌で探す生徒、

それに・・・

職員室でコーヒーを飲んでる生徒。

「何してるの、本城君」

「進路のこと相談しに來いっつったのは、先生だろ」

「そうじゃなくて。勝手に私のコーヒー飲まないで」

「これ先生の？どーりでインスタントだと思った」

「・・・」

私は本城君の手から紙コップを引ったくり、一気に飲んで・・・
むせ返った。

「どうしてブラックにゃによよ!？」

あ、噛んだ。

本城君が噴出す。

「あはは！にゃによよ、ってなんだよ」

「私は砂糖とミルクを入れるの!」

自販機の砂糖・ミルク入りコーヒーが好きじゃない私は、
ブラックコーヒーを持参し、飲む時に砂糖とミルクを入れることに
してるのだ。

ちにみに、砂糖とミルクは机に常備している！

「なんつー面倒なことしてんだよ。学食でコーヒー入れてもらえば
いいだろ。」

ちゃんと豆から挽いてくれるし、砂糖もミルクも言えば入れてくれ

るし」

「学食のコーヒーって！一杯800円もするでしょ！」

「外で飲んだら2千円はするだろ」

「どこでコーヒー飲んでるのよ！」

これだから、堀西の生徒は……！！

「と、とにかく！学部は決めたの！？」

「決めた」

「え？そ、そう」

私は拍子抜けした。

今日こそ腹を割って（？）話そうと思ってたのに。

でも良いことだ。

「どこに行くの？」

「国際情報学部」

「……全然決めてないじゃない」

「だから国際情報学部に行きたいんだって」

「ご両親には話したの？」

「もちろん」

「反対されなかったの？」

「家から叩き出された。お陰で今日は宏の家から登校してきた」

「……」

「推薦状よろしく。これ、賄賂」

そう言って本城君は私の手の中に小さな紙袋を落とすと、職員室から出て行ってしまった。

私、後1ヶ月くらいで退職するのよ。

今更厄介事なんてごめんよ。

・・・でも、やっぱり放っておけない。

私はその日の放課後、本城君の家に出向いた。

今日も家に帰らないつもりなのか、

本城君は和田君と一緒に和田家の送迎車に乗り込んで帰って行った。

和田君の家なんて、何日いても全然迷惑じゃないだろうけど、

本城君はまだ高校生だ。

やっぱり親とちゃんと和解すべきだ。

白い大きな家に気後れしながらも、私はインターホンを押した。

本城君の担任であることを告げると、門が自動で開かれ、私は中に足を踏み入れた。

そこには、家の割にはこじんまりした、でも綺麗に手入れされたお庭が広がっていて、

木製のテラスや小さな池もあり、まるでガーデニングの雑誌に出てくるお庭みたいだった。

「いらっしやいませ」

「こ、こんにちは。はじめまして。真弥君の担任をさせて頂いてお
ります、かみ・・・」

ドタドタドタ！

広い玄関ホールで、本城君のお母さんにしてはちよつと歳がいつて
るかな、という印象の女性に、

硬くなりながら自己紹介しようとした時、目の前のらせん状の階段
から誰かが凄い勢いで降りてきた。

「し、真弥の担任の先生ですか！？」

「は、はい」

「真弥は！真弥はどこにいますか！？」

「ええつと・・・」

私は、階段から転げ落ちそうになりながら降りてきたその女性を眺
めた。

よほど慌てていたのか、顔が引きつっている。

でも、普段から神経質という訳ではなく、今は本城君を心配する余
り、こうなってるだけなようだ。

実際、その女性は、髪も服もフワフワとしており、全体的に優しく
て柔らかい感じ。

普段はもっとおっとりしてるんだろう。

さっきのお庭はこの人の趣味のようだ。

なるほど、この人が本城君のお母さんか。

そう思っで見ると、確かにどこことなく似ている。

してみると、最初の歳がいった方の女性は・・・お手伝いさんか。
そんなのが家にいるのか。

すごいな。

「真弥君のお母様ですね？私、担任の神谷と申します」

「ほ、本城です。あの、真弥は・・・」

「真弥君は、今、友人の和田君のお家にいます」

「そ、そうですか・・・よかった・・・」

よほど心配していたのか、お母さんはへなへなとその場にしゃがみこんでしまった。

でもそこはさすがに良家の奥様。

すぐに気を取り直し、シャキッと立ち上がった、つもりだろうが、ちよつとふらついた。

なんだか、かわいい人だ。

「失礼いたしました。昨日から帰らないので、心配しております」
「はい、本人から伺いました」

このお母さんが本城君を家から叩き出すとは思えない。
という事は、やはり・・・

「あの、ご主人様はいらっしゃいますか？」

「主人は今、事務所の方におります」

「あ・・・そうですよね」

まだ6時だ。

そりゃ帰ってきてないだろう。
しまったな。

「あの、真弥君のことでお話があるのですが・・・また日を改めましょうか？」

「いえ！事務所の方へご案内いたします！」

お母さんはお手伝いさんに、「すぐに車の準備を！」と言った。
本城君に今すぐにも帰ってきて欲しいようだ。

私はお手伝いさんが運転する車で、お母さんと一緒に事務所へ向かうことになった。

その道すがら、軽く情報収集を試みる。

「真弥君はお父様と喧嘩したんでしょうか？」

「はい・・・お手数をおかけして申し訳ありません」

本城君の安否がわかり、安心したのかお母さんもだいぶ落ち着いたようだ。

改まって私に頭を下げる。

「いえ。それは結構なのですが。あの、喧嘩の原因は？」

一応聞いてみる。

「真弥が突然『法学部には行かない』とか言い出したので、主人が怒りまして・・・」

主人も真弥には期待していましたので」

「真弥君は、お家を継ぐ気はないんでしょうか？」

「昨日は、はつきりそう言っていました」

「あの・・・お父様は随分とお怒りなんでしょうか？」

「はい。かなり」

・
・
・
・
さあ、どうして
くれよう。

第9話 お父さん

高そうな調度が品良く並ぶ応接室で、

私は本城君のお父さんで向かい合って座っていた。

なるほど。

本城君のお父さんだ。

お母さんも似てるところがあるとは思ったけど、

本城君の外観的要素はほとんどこのお父さんから来ていると言っているだろうか。

ただ、この人は本城君にないものを持っている。

人の上に立つ者の風格、というか、経営者独特のある種の冷たさ、というか。

もし本城君が跡を継げば、このお父さんのようになるのだろうか。

・・・私の直感だけど、本城君はこうはなれない気がする。つまり、経営者向きではないという事。

本城君自身、それを分かっているのかもしれない。

「はじめまして。真弥君の担任の神谷と申します」

「真弥がお世話になっております」

私に合わせてお父さんも軽く頭を下げる。

下げるより下げられることの方が多い人の、頭の下げ方だ。

でも、ひるんじゃいけない。

私はこの人の部下じゃない。

本城君の担任なんだ。

「真弥君の進路のことでご相談に伺いました」

お父さんは表情を変えない。

でも、一瞬、目じりが動いた気がした。

「ご存知だとは思いますが、真弥君は国際情報学部を希望しています。」

担任の私としても、本人の希望を叶えてあげたいと思っています」

正確には、本城君は国際情報学部に行きたいのではなく、法学部に行きたくないのだけだ。

「そんな学部に行って、どうするんですか？ 真弥は将来どうやって食っていくと言うんです？」

お父さんは落ち着いているけど、その声には怒気が含まれている。

「堀西学園は少々特殊ですが、普通の大学生は、大学に入った時点からはっきりとした将来ビジョンを持っている訳ではありません。」

たいていの学生は、大学4年間の間にゆっくりと自分のしたいことを見つけます。

国際情報学部に行っても、司法試験を受けることもできますし、もう少し長い目で見てやって頂けないでしょうか？」

苦しい言い訳だ。

反撃の余地はいくらでもある。

そして、やはりこの人はそれを逃さない。

「しかし真弥はその特殊な堀西の中にいる。普通の大学生の話をするなら、

真弥も普通の大学に進むべきですな。それはもう遅いでしょう？それとも浪人でもさせますか」

「それは本人の希望次第です。堀西大卒でも、家を継ぐ以外の仕事もできますし」

「堀西の大学卒業者など、家を継ぐ以外能はないでしょう？」

・・・この人は。

この人は、それを分かっている、わざと本城君を堀西に通わせたのだろうか？

敢えて、弁護士以外の道を選択できないように？

そしてまた、本城君の弟も堀西にいる。

本城君が跡取りを放棄すれば、この人は間違いなく、弟に家を継ぐよう強要するだろう。

そうなれば、弟はかわいそうだと思う。

でも私は本城君の担任だ。

本城君のことを守ってあげたい。

もうすぐ堀西を去る私は、

弟のことまでは見れないけど、私は信じてる。

堀西の中にも、きっと情熱を忘れていない教師がいるはずだ。

ううん、本当は教師はみんな情熱を持っている。

ただそれを表に出す機会がないだけだ。

将来、本城君の弟が今の本城君と同じような悩みを持ったとしても、そのときっと手を差し伸べてくれる教師がいるはずだ。

私は信じてる。

「堀西大で資格を取ることもできます。例えば、国際情報学部なら、教員免許が取れます。」

何か資格があれば、堀西大卒でも普通に社会で働けますし、真弥君にはそれができる力があると思います」

興味のあることにはとことんのめり込む本城君だ。

本気でやりたいことを見つければ、きっと成功する。

だけとお父さんは鼻で笑った。

「教員免許？教師？真弥が？」

「いえ、それは例えば、ですけど・・・」

・・・なんかムカムカしてきた。

何、この人。

なんで自分の息子のこと、そんなにバカにできるの？
跡取りにしたいんじゃないの？

「お言葉ですが、お父様は真弥君のことを少々見くびっておられますね」

「・・・なんですと？」

お父さんの顔から笑みが消える。
でも私は構わず続けた。

「真弥君は科目によってムラはありますが、成績優秀です。
特に数学は学年でもトップです。そんな真弥君が本気を出せば、ど

んな資格でも取得できると思います」

「・・・では仮に、真弥がその国際なんとかという学部に進み、教師になったとして、それで真弥は幸せだと言うんですか？この会社を継ぐより？」

「幸せだと思います！」

私は間髪入れずに答えた。

許せ、本城君。

ここは言い切らせてくれ。

さすがに、こんな小娘にここまで強気な態度を取られると思わなかったのか、

お父さんは少し怯んだ。

それでも、何か言おうと口を開いた時・・・

応接室の扉が突然開いた。

「わしもそう思う」

「・・・父さん」

「へ？」

父さん？

本城君のお父さんの「父さん」？

それってつまり・・・

私は慌てて立ち上がり、

扉の前に立つ初老の男性に挨拶した。

「こ、こんにちは。真弥君の担任の・・・」

「神谷先生ですね。真弥からあなたの話は聞いております」

「お、恐れ入ります・・・」

ん？私の話？何を？

と思ったけど、さすがに聞けない。

お祖父さんは立ったまま、中腰のお父さんの方を見た。

「神谷先生の言う通りだ」

「何がですか。真弥は家を継がない方が幸せだと言うんですか？」

お父さんが苦々しい口調で言う。

「教師になればな」

「教師？」

お父さんと私の声が重なる。

「あの・・・」

私は思わず口を挟んだ。

「教員免許とか教師とかは、例えばの話です。真弥君は教師を希望しているわけではありません」

だけどお祖父さんは「おや？」と言いながら、

不思議そうに首を傾げた。

「ですが真弥はわしに、『将来教師になりたい』と言っていましたぞ?」

第10話 お祝い

本城君の家から事務所へ送ってもらった時の車より、遥かに高級な車の後部座席に私はちょこんと座っていた。

もちろん運転しているのはお手伝いさんじゃなく、れっきとした運転手だ。

それもそのはず。

私の横には、あの本城君のお祖父さん・・・本城弁護士事務所の所長が座っているのだから。

「先ほどは息子が失礼をしました」

お祖父さんが私を見て、にこやかに話しかける。

私は慌てて首を振った。

「いえ！こちらこそ、失礼な態度を・・・」

「いや、あれは息子が悪い。息子はどうも事務所のことを考えすぎる。」

何が何でも本城家の人間が所長をしないといけないという訳でもないのに、

次の所長は自分で、その次は息子の真弥だと決め付けているのです。真弥の希望も聞かずに」

「はあ。あの・・・」

私は姿勢を正した。

「真弥君が、教師を希望しているというのは本当でしょうか？」

「ええ。恐らくあなたに憧れてのことでしょう」

「・・・は？」

「真弥のやつも、そうとは言いませんがね。わしにしょっちゅう、あなたのことを話してくる。

『面白い先生がいる』と」

お、面白い？

「『堀西の教師なんてみんなやる気ないのに、一人で勝手に燃えて空回りしてる』だそうです」

「・・・」

「でも、あなたのことを話す時の真弥はとても楽しそうです。だから、この前真弥がわしに、

『教師になりたい。家は継がない』と言ってきた時も、わしは驚きませんでした」

「・・・」

お祖父さんは、「失礼ですが」と前置きして訊ねてきた。

「神谷先生。真弥から何か貰いませんでしたか？」

何かどころか！

私は口をパクパクしながらそれを鞆から取り出した。

本城君が「賄賂だ」と言って私に渡した物だ。

お祖父さんはそれを見て、「やっぱり」と言って笑った。

「お、お返しします！これ、本物ですよね・・・」

無造作に紙袋に入れられていたのは、なんとダイヤのネックレスだった。

それも、0.01カラットの・・・とかじゃない。

かなり大振りの立派なダイヤが中央にあしらわれ、その周りにも、色んな宝石で細かい飾りが施されている。

最初はイミテーションかと思ったけど、もしやと不安になり宝石店で鑑定してもらったら、

間違いなく本物だと言うことだった。

宝石商の人にかなりしつこく「大変貴重な物なので、買い取らせてください」と粘られたが、なんとか振り切った。

もし売れば、かなり立派な車が買える。

とんでもない「賄賂」だ。

でも、どう考えても本城君が買ったとは思えない。

という事は、お家の物、ということになる。

当然このお祖父さんに返すべきだ。

とこどが、お祖父さんは受け取ろうとはしなかった。

「これは、私が妻に買った物なんです」

「え？それじゃ、ますます頂く訳にはいきません！」

私はネックレスをお祖父さんの手に渡そうとしたが、またも拒まれてしまう。

「妻が・・・真弥の祖母が亡くなった時、形見分けということだからこれを真弥にやったんです。」

「だからこれは真弥の物だ。真弥がどうしようと、真弥の自由です」
「でも・・・」

「それでも、真弥もさすがに気が咎めたのか、一応わしに了解を取りにきましたよ。」

『これを人にあげたいんだけどいいかな』と。すぐにあなたにあげるんだと分かりました」

「・・・」

「わしが好きにしていいたいと言うと真弥はわしに礼を言って、こう言っただけです。」

『その人、今度結婚するんだ。だからお祝いにあげたいんだ』

お祝い？

・・・私に？

「さすがにそう言った時の真弥は寂しそうでしたな。あいつは、失恋とは縁のない人生を歩んできましたから」

「・・・そんな・・・あの、やっぱり頂けません・・・」

高価な物だからというのもあるけど、

そんな気持ちのこもった物、もらっちゃいけない気がする。

「もらってやってください。真弥なりに悩んで、あなたのために自分ができる精一杯をしたんだと思います」

「・・・」

「まあ、もうちょっと他にやりようもあるとは思いますが」

お祖父さんはそう言ってニヤツと笑った。

「わしが真弥なら、強引に婚約者から奪い取るところですな、あなたを」

「なっ」

私は真っ赤になった。

「これで真弥も勉強したことでしょう。そのネックレス、真弥からのお祝いとしては受け取れないのなら、わしからの授業料として受け取ってください」

「・・・ありがとうございます。でも高すぎます。こんな・・・車ほどもするネックレス。」

真弥君にとってもお婆様の大事な思い出の品ですし、財産でもありますし」

「そうですね。では、頑張って『授業』を受けた真弥には、わしから何かご褒美をやっておきますよ。」

そうだな・・・教師になれた時に、それこそ車でも買ってやりますか」

お祖父さんはとても楽しそうに、大きな声で笑った。

第11話 卒業式

「ごめんね」

「・・・うん、いいよ。琴美の好きにすればいい」

祐樹はそう言ってくれたけど、内心ガツカリしているのはわかっている。

結婚して、一緒に福岡に行って、私が専業主婦になることを望んでいたのだから。

今までずっと、祐樹が希望することで私にできることは何でもしてきた。

それが私の喜びでもあった。

でも、祐樹の希望と私の喜びがずれたのは、5年間の付き合いでこれが初めてと言ってもいい。

携帯の向こうから、祐樹のため息が聞こえた。

「・・・どうしたの？」

「いや。ちょっと安心した。話があるなんて言うから、俺、結婚をやめたいとか言い出すのかと思って、

ちょっと冷や冷やしてたんだ」

「ええ？何言ってるの。そんな訳ないじゃない。第一、結婚式、明日よ？」

「そうだよな」

「ふふふ。でも、危なかったわよ、祐樹。私のクラスのイケメン君が、私のこと好きだったみたい。」

もし祐樹より先にその子にプロポーズされてたら、その子を選んでたかも。お金持ちだし」

「・・・」

「ちょっと。冗談よ。何、本気で落ち込んでるの？」

私は苦笑いした。

祐樹はいつもこうだ。

すぐにヤキモチを妬くし、不安になる。

5年も付き合ってるんだから、私が好きなのは祐樹だけっていい加減わからないのかなあ？

でもさすがに明日結婚式なのだ。

祐樹もそれ以上落ち込むことなく、明るく言った。

「じゃあ明日、式場でね。琴美のドレス姿、楽しみにしてるよ」

「まかせて。私だって分からないくらい化けるから」

「あはは、おやすみ」

「おやすみなさい」

私は布団をかぶり、目を閉じた。

今日、無事堀西高校の卒業式が終わった。

そして明日、私は結婚する。

毎年のことだけど、堀西高校の卒業式はさっぱりしている。

出席する保護者達が社長や政治家などそうそうたる面子なので、警備から席順から大騒動ではあるけど、

当の生徒達はほとんど全員がそのまま同じ敷地内の大学に進むのだ。特に涙もなく、明るく「バイバイ」である。

ただ高校の教師とは別れることになるので、一応写真や握手を求めてくるけど、

元々教師を舐めている生徒達だ。これもさっぱりしたものだった。

でも私は、これで自分もこの高校を卒業かと思うと、無性に寂しくなった。

結婚退職することを生徒に言っていない手前、堂々と(?)悲しむことはできなかったけど、涙を堪えることはできなかった。

生徒達はそんな私を笑いながら、「何泣いてるんだよー?」「またいつでも会えるってー」と、慰めながら手を振ってくれた。

自己満足ではあるけど、この数ヶ月、充実していた。こんなに一生懸命授業をしたのは、初めてだ。

生徒の成績は最後まで相変わらずだったけど、授業だけはほんの少し今までより真面目に聞いてくれた気がする。

教師が本気になれば、生徒もちゃんと応えてくれるんだ。

何年も教師をやってきたのに、今更こんな初歩的なことに気づくなんて。

でも、最後に気づけてよかった。
生徒達みんなに感謝したい。

そんな気持ちで教室の窓から1人、
校庭ではしゃぐ生徒達を見てたら、突然声をかけられた。

「先生」

「本城君……。卒業おめでとう」

「うん……。お世話になりました」

いつもは適当に制服を着ている本城君だけど、今日ばかりはキチツ
としている。

そんな本城君が礼儀正しくお辞儀なんかすると、優等生に見えて笑
えてしまった。

「なんで笑うんだよ」

「いやー、似合わないなあ、と思って」

「……」

本城君はムスツとして、卒業証書の入った筒で肩をポンポンと叩き
ながら、
窓の方にやってきた。

「先生、ありがと。父さんに直談判してくれたんだってな。じいち
ゃんから聞いた」

「直談判って言うか……」

結局、お祖父さんがお父さんをなだめてくれたのだ。
更に図々しいことに、私は本城君の弟が本城君と同じようなことで
苦しまないよう、

お祖父さんをお願いしてしまった。

「息子はまだ真弥のことを諦めてはないようだが、取り合えず大学は真弥の好きな学部に進ませることになった。真弥の弟の件は・・・わしが生きていれば、なんとかしよう」

生きていれば、なんて言わず、いつまでも長生きしてほしい。ご自分のためにも本城君と弟のためにも。

本城君が本気で教師になりたいのなら、大学生の間もお父さんといザコザが絶えないかもしれない。
でも、頑張って欲しい。
頑張って教師になって欲しい。

「父さんに楯突いた奴なんて初めてだ」

「ふふ。怖いもの知らずだから、私」

「そうだな。・・・なあ、じいちゃんから何か聞いた？」

「何かって？」

「いや・・・」

本城君は気まずそうに私から目を逸らした。

どっちのことを言ってるんだろう。

ちょっと意地悪してやれ。

「本城君。教師になるなら、好きなことだけに熱を上げてちゃダメよ。

苦手なことにもチャレンジしないといけないし、ましてや生徒には平等に接しないと。

女の子に冷たいのも、治さないとね」

「！」

本城君はちょっと赤くなったけど、すぐにいつもの表情に戻った。

「なんだよ、聞いたのかよ」

「うん。それは聞いた」

「・・・それだけ？」

「それだけよ」

あからさまにホッとする本城君。

かわいそうだから、これくらいにしておこう。

「じゃあね。大学に行っても頑張って」

「・・・うん。それじゃ」

本城君は軽く手を上げて、教室から出て行った。

第12話 結婚式

「新婦様、お時間です」
「はい」

私は深呼吸してドレスサーから立ち上がった。

純白のドレスに薄いベール。

ピンクの艶っぽい口紅。

胸元にはダイヤのネックレスが光る。

綺麗、だよね？

私じゃないみたい。

ついにこの日が来た。

子供の頃から夢見ていた、お嫁さんになる日が。

なんか信じられない。

感激で胸が苦しいくらいだけど、

今日でその夢が実現し、終わるのかと思うと寂しくもある。

ううん。

終わるんじゃない。

明日からは、また新しい夢が始まる。

祐樹との生活。

二人で一緒に暮らして、いつか子供が生まれる。
そして家族みんなで幸せになるんだ。

私はもう一度深呼吸して、控え室を出た。

私達が結婚式を挙げるこの会場は、

広いお庭の中に、白いチャペルと披露宴会場のレストランがある。
食後のデザートは、寒いけどお庭でのビュッフェだ。

いい天気で本当によかった。

祐樹もお客さんも牧師さんも、もうチャペルの中に入っている。

後は私がお父さんと腕を組んで、入って行くだけ。

今ほど、女に生まれてよかったと思うことはない。

ブライダルコーディネーターの人に案内され、
チャペルの閉じられた大きな扉の前で、お父さんと腕を組む。

「ふふ。お父さん、緊張しすぎ」

「緊張なんかしてない」

「だって、顔真っ赤だもん」

「・・・」

「ふふふ」

ほんと、始まる前からこんな緊張しちゃってどうするのよ。
中に入ったら、倒れちゃうんじゃない？

・・・やだなあ、なんか泣きそう。

口紅を気にしながらも、ちょっと唇を噛んだ時だった。

「せーんせ」

・・・え？

驚いて振り返ると、そこには・・・

「あなた達、何やってるの？」

昨日卒業したはずの3年C組の生徒達が全員、制服姿で立っていた。

「先生が結婚するって聞いたから、みんなでお祝いに来たの」

「水臭いなー。なんで言ってくれないんだよ」

「本城から聞かなかったら、知らないままだったぞ？」

私は驚きすぎて、口がきけなかった。

思わず本城君の姿を探すと、

昨日のようにキチツと制服を着た本城君が、少し照れくさそうにみんなの後ろに立っている。

「せんせー、おめでとーう！」

和田君がそう言ったのを皮切りに、あちこちから「おめでとー！」

と拍手が起きた。

「・・・ありがとう」

「あーあ。先生、泣いちゃった」

「せっかく化けてるのに、化粧が崩れるぞ？」

「でも、すごい綺麗！先生ってわかんなかったもん」

「・・・あなた達、褒めてるの？」

「一応ねー。でも私なら絶対もっと綺麗よ！」

もう。

相変わらず生意気な子達なんだから・・・

笑いたいのに涙が止まらない。

本当に化粧が全部落ちてしまいそうなくらい。

どうしてくれるの・・・

和田君が引っ張るようにして、本城君を私の近くに連れて来た。そう言えば、冬休みにも和田君は本城君を職員室に連れてきた。あれは本城君を私に会わせるためだったのかな。結構友達思いなんだよね、和田君で。

「・・・先生、おめでとう」

「・・・ありがとう」

私はそっと胸元を触った。

本城君がくれたネックレス。

結婚式につけるのは祐樹に悪いかなって少し気が引けたけど、

これが、唯一本城君の気持ちに伝えられる方法だと思い、つけることにした。

こんな高価な物をつける機会も、もうないだろう。

祐樹には一生秘密。

またヤキモチ妬いちゃうから。

本城君は、その私の胸元を見て、優しく微笑んだ。

本城君、なんか前にも増してかっこよくなった気がする。
将来の目標ができたからだろうか、目が生き生きして輝いている。

でも、どこことなく寂しそうに見えるのは・・・私の気のせいということにしておこう。

「先生！遠くに行っちゃうってホント？」

石黒さんが口を尖らせて聞いてきた。

「うん。福岡に行くの」

「ええー？じゃあもう堀西にはいないの？」

「・・・うん」

「でも！福岡でも教師は続けるんだよね？」

私は涙を拭き、満面の笑みで答えた。

「もちろんよ」

本城君が少し目を見開いた。

私は本城君に目で語りかける。

本城君。

私、教師になった君といつか会ってみたい。

「こんな生徒がいて困っててさー」「あ、私のところにもそーゆー子
いる！」

とか言いながら、お酒でも飲んでみたい。

だから、私も教師を続けるよ。

私はもう一度お父さんと腕を組み、
開かれた扉の中へと、ゆっくり歩き出した。

——「私と彼の生きる道」 完 ——

第12話 結婚式（後書き）

「私と彼の生きる道」を最後まで読んで下さり、ありがとうございます。

「先生の彼女!」「あの子の恋愛事情!」の番外編(?)としてさりげなく書いてさりげなく更新していたのですが・・・

なんとなく、今まで書いたお話の中で、個人的には一番好きなお話になってしまいました。唯一、ハッピーエンドとは言い切れないお話だからでしょうか・・・

本編と合わせ、今後ともよろしく願います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9181j/>

私と彼の生きる道

2010年10月10日06時29分発行